



海道 和男

(かいどう・かずお)

多忙なか、運動不足を痛感し、ウォーキングが趣味になったという。「歩行者目線でのカーブミラーの見え方が大切だと再認識しましたね。新しいアイデアがどんどん出てきます」

交通インフラの安心と安全を支えるために、長年培った技術力で時代の一步先を行くカーブミラーを。



昨今のいわゆる「カーブミラー萌え」は、カーブミラーに写り込んだ風景を撮影し、SNSで公開したり、閲覧したりする楽しみ方のことだ。これも、運転時の死角を極力なくするための丸みを帯びた鏡面が、独特の世界観を生み出すからだろう。

「ナック・ケイ・エス」(福井県福井市)を中核とする「ナックグループ」は、素材と

技術の両面で工夫を重ねてきた。その結果、アクリル樹脂を用いたカーブミラー鏡面の国内シェアは約70%。同社長の海道和男氏は「かつての鏡面はガラス製でした。当社は真空形成技術や真空蒸着技術を生かし、アクリル製カーブミラーのバイオニアとなりました」と胸を張る。同社は1970年に創業し、プラスチック成型で大型の浴槽やタンクを手

がけていた。カーブミラーの裏板づくりを受注したのを機に、75年からは鏡面の製造販売に着手。アクリル板をドーム状に成型し、裏側にアルミニウムを吹き付ける。真空状態で素材を加熱し、附着させる独自手法で、ガラス製よりも軽く、丈夫な鏡面を開発した。

ときは、72年誕生の田中角栄内閣が掲げた「日本列島改造論」のまったた中。全国的な交通網の整備にともない、カーブミラーのオフアワーは急増した。海道氏は、同社の製品が普及した要因として、販売代理店を置かず、特約店方式をとることで、各自治体の隅々にまで販路を広げた点を挙げる。特約店数は現在、国内外で約4300に上る。

「直接取引のメリットは、いろいろな情報が入ることです。道路にミラーを立てるだけでなく、電柱や壁への設置など、要望にも地域ごとの特色がありました。現地の状況を把握し、小回りのきいた対応をとれたことで、今日に至るまで顧客ニーズに応えられています」

80年代の同社は、アクリル製カーブミラーに注力しすぎることなく、浴槽など他部門にも投資している。さらに、コンクリート製が一般的なだった遊泳用プールをプラスチックで手がけたほか、独自の遠心重合技術を用いてのキャストイン

グアクリル樹脂パイプを開発するなど、新機軸にも取り組んだ。同パイプは照明器具や、水族館の大型水槽など幅広く活用されている。

91年入社のだ海道氏は、潜熱蓄熱式ミラーや電熱防曇ミラーなどの開発に携わった。太陽熱の蓄熱、あるいは内蔵するサーモスタットによって、鏡面の曇りや氷結を防ぐ技術だ。この頃、コンビニが爆発的に店舗を増やしており、防犯用としての屋内用ミラーの需要が高まった。海道氏は、清掃で傷がつきにくいコーティングを模索したという。

近年、台風被害が相次ぎ、各地でカーブミラーが破損・倒壊している。大雪の年には、除雪車や大型車との接触事故も目立った。地域ごとの事情に合わせて、カーブミラーをつくることのできる同社は今後いっそう強みを発揮することになりそうだ。

近い将来に到来するであろう自動運転時代を見据え、車両や歩行者を感知するセンサーを、カーブミラーに装着するといったアイデアも温めている。「世のなかの交通事故が1件でも少なくなれば、当社の商品が役立っているということ」と海道氏。広く交通安全意識が高まることを期待しつつ、ものづくりへの熱意をたぎらせる。